

# 総務文教常任委員会 行政視察報告書

■期 日 平成30年7月9日（月）～11日（水）

■視察地 香川県丸亀市、愛媛県西条市、松山市

## ◎香川県丸亀市（7月9日訪問）

### 《丸亀市の概要》

香川県の海岸線側ほぼ中央部に位置し、北は風光明媚な瀬戸内海国立公園、南は讃岐山脈に連なる山々、陸地部は讃岐平野の一部で、平坦な田園地帯が広がっている。瀬戸内海には本島、広島などの島々が点在している。温暖少雨のいわゆる瀬戸内特有の気候。土地利用については、田と山林がそれぞれ約20%と大きな割合を占めている。

古くから海上交通の要衝として、また物資の集散地として発展し、特に金刀比羅宮（こんぴらさん）の参道口として大いに賑わった。1602年（慶長7年）生駒氏が亀山に築城し、丸亀城と名付けたのが「丸亀」の名の起こりといわれており、以後城下町として栄えてきた。平成の大合併により、平成17年3月22日に旧丸亀市、旧綾歌町、旧飯山町が合併し、新「丸亀市」として新たに発足。中西讃地区では初めて人口が10万人を超え、中讃地域の核として重要な役割を担っている。

■面 積：111.78km<sup>2</sup>

■人 口：109,621人

■世帯数：44,848世帯

### 《調査事項：川西地区の防災まちづくり活動について》

丸亀市では、近い将来発生すると予測されている南海トラフ地震等の大規模災害に備えるため、自分たちの地域は自分たちで守る「共助」の要となる自主防災組織が非常に重要な役割を担っている。市内では、連合自治会を中心に市内17のコミュニティ全てで自主防災組織が結成され、活動カバー率（全世帯数に占める自主防災組織の活動範囲に含まれている地域の世帯数の割合）は100%となっている。

川西地区地域づくり推進協議会では、地区のまちづくり計画のスローガンに「自主防災を確立するため積極的な訓練実施と防災備品の充実を図る」を掲げ計画的に取り組んでいる。その活動内容が評価され、平成22年3月には「第14回防災まちづくり大賞（総務大臣賞）」を、同年9月には「防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞。

「人づくり」「物づくり」「絆づくり」の3本を柱とし、地域内の安全安心な取り組みを底辺からしっかり広げると共に、小・中・高等学校での児童生徒への防災教育の展開を目指す。また、防災伝道師として他地域へも積極的にノウハウを伝え広域連携の絆づくりに力を注ぐことを目標とする。

### ①川西地区地域づくり推進協議会ならびに川西地区自主防災会の位置付けと設立の経緯について（行政との関わり等）

平成6年から8年頃にかけて、小学校区単位の新しい枠組みをコミュニティ組織とし、旧公民館等をコミュニティセンターとして、それぞれ抱えている課題を自主自発的に解決する組織を作る動きがあった。川西地区では、平成7年3月、行政からの強い要請があり、地域づくり推進協議会（コミュニティ組織）を結成。

47の単位自治会が加入している。

行政から独立し活動することで充実化が図られるが、いつまでも行政依存の地区もある。自主防災会は、平成14年2月に地域づくりの機関車役として結成。当初は単位自治会ごとの結成を促されたが、備蓄品の整備等で無駄が発生することからまとめた方が機能的と考える。あくまでも自主自立の組織として、行政には依存していない。

### ②防災活動における具体的取り組みについて

- ・平常時には、次のような活動に取り組み、地域の防災活動に貢献  
地域の安全点検、避難経路・避難場所の確認・点検、防災知識の普及・啓発、防災資機材の整備・点検、防災訓練、防災マップの作成
- ・災害時には、被害を最小限に抑え、まちの復旧・復興に向けた活動に取り組む  
避難誘導、初期消火、救出・救護、情報の収集・伝達、要配慮者の安否確認、給水・給食

### ③内閣総理大臣賞を受賞した主な要因について

- ・教育現場（幼稚園～高校）と連携し防災研修（教育）を実施。
- ・避難所の設営、運営等、体制の整備及び体系的な防災備品の整備。
- ・川西地区以外へのノウハウの提供、民間企業との連携。PDCAサイクルにより継続的に取り組んでいることが評価された。

### ④活動の効果、課題について

- ・地域の連帯性、地域力が向上した。半端な取り組みでは自治会の加入は増えないが、加入率が上がっているのは、底力がついている証拠。
- ・権限なくして説得するのは相当なエネルギー、組織力と粘り強い展開力が必要。
- ・避難訓練への参加意識が高く、非常持ち出し袋を持ってくる人も増えた。やっていることは同じでも年々参加者の心掛けがレベルアップしている。
- ・地元小学校の防災教育も教職員の理解により実施できている。人事異動があっても防災文化を引き継ぎ、意識を育んでいる。
- ・企業団体との連携強化。社屋の提供。物心両面で支援あり。いやだと言われたことない。企業が育っている。同調してくれている。
- ・活動の課題は、主力メンバーの高齢化。大幅にメンバー交代しなければいけない時期がいずれやってくる。



川西地区コミュニティセンターでの視察



川西地区自主防災会会長による説明



防災マップ



防災備品庫



防災備品庫の内部



市内に点在する土のうステーション

## ◎愛媛県西条市（7月10日訪問）

### 《西条市の概要》

愛媛県内第3位の面積を有し、南には西日本最高峰の石鎚山、北には瀬戸内海と、海と平野と山が揃う自然豊かなまち。経営耕作面積は四国一の広さを誇り、水田面積は4,269 ㌦と、県内の25.4%を占める。また、全国一の生産量が算出されているはだか麦やあたご柿、春の七草、県下一の収穫量を誇る水稻、メロン、にんじん、ほうれん草など多くの農作物を供給する生産都市となっている。さらには、瀬戸内の豊かな海が育んだ伝統の海苔や魚介類など、水産業も盛んに行われている。

臨海部には世界屈指の規模を誇る今治造船や、ルネサスエレクトロニクスの半導体工場、アサヒビール四国工場、日新製鋼、クラレ西条事業所が立地するなど、製造業をはじめとするさまざまな大企業が約250社、中小企業が約2,500社立地している。市全体の工業製品等出荷額は8,859億円（H24工業統計調査）に上り、四国屈指の工業集積地となっている。

■面積：178.94km<sup>2</sup>

■人口：52,027人

■世帯数：22,910世帯

### 《調査事項：「ICT教育推進事業」について》

未来を担う子どもたちへの教育環境の充実は重要な課題であり、「分かる授業」を行いながら子どもたちの学力を向上させることが極めて重要な責務である。

学校現場におけるICTの利活用についても、教育の質を高め、子どもたちの学力を向上させる大きな可能性を秘めていることから、西条市では市内の全ての小・中学校の普通教室等に電子黒板などを設置する事業を平成27年度から展開している。手書きの良さ、じっくりと辞書をひくことも今までと変わらず大切であることから、デジタルとアナログ、それぞれの良さをしっかりと使い分けながら、将来を担う子どもたちの「学力の向上」ひいては「生きる力」を育む。

#### ①事業開始の背景、経緯について

もともと整備が遅れており、県内では最下位に近かった。平成22年度から主要メンバーで検討チームを作り、現場の先生の要望に応えるよう協議した。平成24年度から2年間はモデル校を作り、どういったものを使えばどういった効果があるかを実証実験した。この取り組みが有効であった。市議会の福祉文教の委員も参加し、子どもたちと一緒に給食を食べたり、PTAと協議したりと、現場の声を聞いていただいた。戦略的に演出を考えた結果、成果が認められ、平成27年度から全体への展開が可能となった。保護者、議員、地域住民を巻き込んだため、市長、執行部も理解が早く、機運の高まりを感じた。

## ②主な（特徴的な）取り組み（ハード、ソフト）について

### ○電子黒板、デジタル教科書

- ・主要な教科書をクラウドに保管し表示する。
- ・家庭科や体育の動画を表示することで授業を効率化。
- ・分かりやすく説明でき、子どもたちの興味も増す。
- ・当初は教員の抵抗があったが、導入時に協力して検討したため満足度は高い。

### ○校務支援システム、グループウェア

- ・名簿をベースに、登校管理、保健管理。
- ・身長体重、歯科、学校医とのやりとり等、養護教諭の業務に有用。
- ・学校行事、施設の予約、その他各種情報を、学校内、学校間、教育委員会、個人間で共有。行政とは別に学校に特化したグループウェアがあることが重要。
- ・特に、掲示板、メッセージ、施設予約、アンケート機能が便利。災害時の連絡、報告にも利用可能。
- ・事務が軽減。教員の多忙化が追い風になった。教員には残業の概念がなく、市としてできることは、教員一人ひとりの意識を変えること。
- ・教員の連帯感、連携につながっている。校長先生同士、教頭先生同士、事務の先生同士等、ICTをきっかけに広がった。

### ○テレワーク

- ・仕事の持ち帰りや、一旦帰宅し家事をこなした後に再度出勤する教職員は全国的に多数いる。
- ・校務支援システムを学校だけでの利用に制限せず、いつでもどこでも安全安心に使える仕組み作り。
- ・教育現場のワーク・ライフ・バランスに向けた大きなツールになると確信。
- ・従来の仕事の仕方に合わせたシステムを構築しては意味がない(ガラパゴス化)。システム導入により仕事の仕方を変えることが重要。

### ○ICT支援員

- ・校務支援システムの使い方がわからない教員の支援を行うほか、情報モラルの研修やプログラミングの研修等を行う。
- ・サポートサービスの大手、ベネッセとの委託契約により、西条市内の人材を雇用。主婦層で優秀な人材集まった。素人もいたが基礎研修をベネッセが行った。
- ・曜日単位で巡回し35校を回る。
- ・研修主任の先生方と打ち合わせし、それぞれのリクエストに合わせて準備。実際の授業にサポートとして入る。

### ○バーチャルクラスルーム（遠隔合同授業）

- ・「教育現場の活性化」は地方創生へのチャレンジ。
- ・学校の統廃合は一つの考え方でメリットデメリットがあるが、東京一極集中を反省する必要。学校を統廃合して過疎地域が町中にいくというベクトルは、私たちが東京に住むのと同じ線上にある。

- ・ 幸い、西条市では学校を極力統廃合しない方針。統廃合しなくてもよい手段をどう整え授業の質を高めるか。子どもたちには基礎だけでなくプレゼン能力、コミュニケーション能力等、育んでもらいたい。意見を聞いて判断する能力、批判的思考力、21世紀型スキルを育成する手段。
- ・ 教員の負担は増えるが、定着させるためにどれだけシンプル化するかが課題。

### ③2018日本ICT教育アワードを受賞した主な要因について

整備内容では、もっと進んでいる自治体あるが、アピールポイントとして振り返ると、市長が政策として打ち立てたことが大きい。市長が交代し、前市長からやりたかったことを引き継いだ。ICT教育だけでなく、地域の課題をICTで解消しようという可能性を感じる取り組みであった。首長みずから動き、教育の情報化を、教育の課題を、ひいては地域の課題を解決していくという、まさに地方創生である。

市長の政治姿勢として「市民にわくわくを感じてもらいたい」を念頭に置いている。そこにICTがどこまでツールと入っていったかが評価された部分である。



市立玉津小学校での視察



教育委員会担当者による説明



実際の授業の様子を視察



電子黒板を活用した授業

## ◎愛媛県松山市（7月11日訪問）

### 《松山市の概要》

愛媛県のほぼ中央にある松山平野に位置する県都。明治6年に愛媛県庁が設置され、明治22年に市制を施行以来、政治・経済の中心都市として成長。昭和20年、市街地の大部分を戦災により焼失したが、今日では総合的な都市機能を備え、平成12年4月には中核市へ移行、平成17年1月には北条市、中島町と合併し四国発の50万都市となった。また、俳人正岡子規をはじめ、多くの文人を排出するなど地方文化の拠点としての役割を果たしてきた。小説「坊ちゃん」「坂の上の雲」などで知られる。これらの観光資源を背景として「国際観光温泉文化都市」の指定を受けている。

気候は温暖な瀬戸内海気候。降水量は少なく、積雪もごく少量。太平洋側の高知県や徳島県に比べ、台風の通過も少なく穏やかで恵まれた気候条件である。

コンパクトシティ構想により、さまざまな文化施設が立地しており、アーケード街や四国唯一の地下街「まつちかタウン」、松山市駅ビルに併設された商業施設、道後温泉、各種美術館等、多様な文化的観光スポットが集中して存在する。また、スポーツ施設も充実しており、特に松山中央公園にある最新設備を導入した「坊ちゃんスタジアム」は有名。

■面積：429.40km<sup>2</sup>

■人口：513,743人

■世帯数：248,757世帯

### 《調査事項：「坂の上の雲まちづくり」について》

小説「坂の上の雲」は、司馬遼太郎が10年の歳月をかけ、明治という時代に立ち向かった松山出身の秋山好古・真之兄弟と正岡子規たちの青春群像を渾身の力で書き上げた壮大な物語。松山市では「『坂の上の雲』のまち 松山から未来を拓く」を独自のキャッチフレーズに定め、改めて松山の魅力を振り返り、ふるさとへの愛着や誇りを高めるとともに、前を見つめ坂の上の青い天に輝く一朵の白い雲を目指した主人公のように、市民が夢や希望を抱き、挑戦し続けるまちづくりを行う。

#### ①事業開始の背景、経緯について

- ・平成14年度に策定した松山市第5次総合計画において、基本理念として「坂の上の雲を目指して」を掲げた。翌年には市役所内に「坂の上の雲まちづくりチーム」を設置し、全庁一丸となって取り組んだ。
- ・NHKのドラマ放映が追い風となり、平成16年に地域再生計画の1号認定を受け、都市再生整備計画を策定。まちづくり交付金を活用して観光拠点となるロープウェー通りや道後温泉周辺の景観整備、中核施設となる坂の上の雲ミュージアムの建設等を重点的に進めてきた。

#### ②主な（特徴的な）取り組み（ハード、ソフト）について

#### ○市全体が屋根のない博物館「フィールドミュージアム構想」

- ・全国から観光客が訪れることを想定し、松山城周辺をセンターゾーン、その他をサブセンターゾーンと位置付け。特に道後温泉サブセンターゾーンを重点的に整備。
- ・センターゾーンはもともとあった各種スポーツ施設を郊外に移転し、広大な緑地公園（セントラルパーク）化した。
- ・ミュージアムは平成 19 年 4 月に開館。小説の主人公 3 人の人生や業績を分かりやすく紹介するなど、坂の上の雲を深く理解してもらおう拠点施設。
- ・このほか、市民活動の拠点、交流施設として開放している。
- ・道後温泉は、車の動線を変更し、観光客が安全に回遊できるよう整備した。

#### ○フィールドミュージアム活動支援事業

- ・小説に関連する取り組み、地域資源を活用して活動する市民、団体に事業費を助成。
- ・地域資源＝人や場所

地域やモノ ※大きく 3 つに分類  
風習や活動

#### ○地域の宝みがきサポート事業

- ・隠れた地域の宝を知っていただく取り組みを行う団体等に助成。
- ・史跡の解説板、マップ等が対象で上限は 30 万円。補助率は 100%。
- ・フィールドミュージアム活動支援事業と合わせて市民主体の活動を支援。

### ③事業の効果について

- ・しまなみ海道が開通した平成 11 年に観光客数 600 万人を達成。以来減少傾向にあったが、ハード整備やドラマ放映等により回復に転じ、平成 22 年には 588 万人。その後、東日本大震災の影響やドラマ終了等の影響で再び減少したが、地道な活動が功を奏し平成 29 年は 600 万人に回復。

### ④指定管理の状況について

- ・開館当初から指定管理を導入し現在 3 期目。
- ・建物の維持管理、入館受付、各種イベントは指定管理。
- ・展示部分は 100%市直営とし、学芸員は市の職員のみ。
- ・直営と指定管理とで情報交換しているが、線引きしている。
- ・事業を実施していく中で、グレーなゾーンは協議して決定。
- ・まちづくりの中核施設であれば、民間にお任せというわけにはいかない。マンガを含めた芸術活動を売りにするとなれば、採算が合わなくても堅持しなければならない点。ただし、管理者が専門知識を持った財団だとすれば完全な民間企業とは事情が異なるため一概には言えない。





坂の上の雲ミュージアムでの視察



事業担当者による説明



学芸員による説明



一帯をセントラルパークとして位置付け

## 【視察を終えて ～委員所感～ 】

### ◎菅原 恵悦 委員長

#### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

丸亀市では、予想される南海トラフ地震等の大規模災害に備えるため、地域は自分達で「共助」の要となる自主防災組織が結成されている。特に、川西地区地域づくり推進協議会では、「自主防災会」を結成し、地区のまちづくり計画のローガンに「自主防災を確立するため地域の安全点検、避難経路、避難場所の確認、点検、防災知識の普及、啓発、防災資機材の整備・点検、防災訓練、防災マップの作製等を積極的に行っており、その活動内容が評価され、平成22年3月には「第14回防災まちづくり大賞（総務大臣賞）」を、同年9月には「防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞した。その経緯等について、実際に、自主防災組織の代表の方のお話を聞いたほか、市内各所に整備された防災倉庫も見せていただいた。

- ・川西地区地域づくり推進協議会(コミュニティ組織)は丸亀市からの要請により平成7年3月結成、「自主防災会」は平成14年2月に設立。
- ・防災活動における具体的取り組みとして、自治会加入促進活動やコミュニティ便りの発行、河川や道路の環境維持、小学校と連携した人権ポスター標語の作成等で、これらの事業実施に当たり8つの部を設け、特に防災部では、幼稚園、保育所、小中高との防災研修、地域の防災まつりと夜間避難訓練などを実施することで防災文化の形成と企業団体との連携強化が図られているなど参考になることが多かった。

また、

- ①教育現場における防災研修
- ②避難所の設営・運営
- ③体系的防災設備品の整備
- ④県内全域にわたっての防災ノウハウの提供

以上の取り組みにP(計画)D(実行)C(評価)A(改善)サイクルを導入しての取り組みの評価が内閣総理大臣賞を受賞した主な要因とのことであった。

計画内容はどうなのか、実行してみてどうか、評価はどうか、今後改善はどうか、このサイクルは行政にも求められており、これまで以上、横手市の事業一つ一つについて実施しなければならないと感じた。

その他、給電、照明、炊き出し用品、避難所設営用品等、防災用資機材の保有・点検状況も見せていただき、災害時は、行政依存ではなく身近なコミュニティで活動できる準備と訓練の大切さを学んだ。

#### ②西条市：ICT教育推進事業について

未来を担う子ども達への教育環境充実は重要な課題であり、「わかる授業」を行いながら子ども達の学力を向上させることが極めて重要な責務である。いま、学校現場におけるICTの利活用は教育の質を高め、子ども達の更なる学力を向上させる可能性を秘めていることから、愛媛県西条市ICT教育推進事業を視察・

調査した。

西条市では、ここ数年「ICT教育」を推進しており、「2018年ICT教育アワード」を受賞している。西条市教育委員会担当者から事業開始の背景や目的について説明を聞いたほか、西条市立玉津小学校を訪れ電子黒板を活用した授業を見学した。

西条市では市内のすべての小・中学校の普通教室等に電子黒板などを設置する事業を平成27年度から展開している。手書きの良さ、じっくりと辞書をひくことも今までと変わらず大切であることから、デジタルとアナログ、それぞれの良さをしっかりと使い分け、将来を担う子ども達の「学力向上」ひいては「生きる力」を育む等、文科省が推進している「主体的」「対話的」で「深い学び」の推進、21世紀型スキルの育成に取り組んでいる姿が担当者の説明と授業見学から感じられた。

学習指導要領の改訂により小学校のプログラミング教育が必須となる中、西条市の取り組みは先を行く事業と考える。

### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

横手市増田は蔵の街として、平成25年12月に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されて以来、お客様の数は増え、経済効果は確実に大きくなっていると感じている。この地域には、日本一のまんが原画を収蔵する「増田まんが美術館」があり、更なる賑わいの創出を期待し大規模改修、リニューアルしている、今後のまちづくりの参考にと、愛媛県松山市「坂の上の雲まちづくり」を視察・調査。

愛媛県松山市では「坂の上の雲」のまち、「松山から未来を拓く」をキャッチフレーズに定め、改めて松山の魅力を振り返り、故郷への愛着や誇りを高めるとともに、前を見つめ坂の上の青い天に輝く一朵の白い雲を目指した主人公のように、市民が夢や希望を抱き、挑戦し続けるまちづくりを担当者より説明を受け、その後「坂の上の雲」ミュージアムを見学した。

司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」事業に、松山市では、松山城や道後温泉等、恵まれた観光資源を活用した周遊性の高い物語のあるまちを目指し整備が進められている。横手市としても重伝建地区選定とまんが美術館を北東北の新たな観光の核としてJR東日本と提携するなど、更なる工夫と努力が必要であると感じた。

## ◎加藤 勝義 副委員長

### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

当該地域コミュニティ組織は、対象2,700世帯6,900人で参加者が約1,000世帯余りで、今後は加入促進に取り組んで行くとしていた。地域づくり推進協議会と自主防災会設立経緯の中で、平成7年当初に丸亀市からの要請により地域づくり推進協議会（コミュニティ組織）が結成されたが、参加者が少なく十分な活動が出来なかったため、「地域防災」を主体に地域活動をして来たとの事である。8

専門部でそれぞれの活動をしているが、説明の中では防災部の活動が際立っていた。地域のあちらこちらに備蓄倉庫の設置や維持管理、防災マップの作成、無線ネットや発電機の管理などがある。これは南海トラフ巨大地震の発生時の対応に対して整備や準備が進んでいるものと思う。しかし、活動はあくまでも自主自立型で備蓄品などの準備は会員の会費によるもので行政に依存していないとの説明でもあった。しかし本来、災害時の備品調達費用や準備は行政がするものではないかと思ったところである。自助や共助、公助のあり方を再考することが出来た。そして、協議会の会長さんの強力な行動力もあっての運営と感じたが、継続するためには組織を引っ張っていくマンパワーなど多くの賛同者も今後必要になるのではないかと思う。

その中において、避難所や備蓄場所を公共施設だけでなく、民間事業者と連携し民間施設を利用している。正に官民挙げて地域防災を目指していることは参考となった。

## ②西条市：ICT教育推進事業について

学校教育で、ICT教育に力を入れている西条市を視察した。児童生徒のタブレット使用やバーチャルクラスでの授業などに力を入れている。さまざまな質疑応答の中で、地域とのかかわりや理解の必要性として、地域住民からICT支援員を求めて活動している事例が紹介された。ICTをさらに効果的に活用できるため教職員からの評価も非常に高く、安心感を与えているとの事からICT支援員の存在は大きいとしている。これは学校、家庭、地域の連携によりICTも含めて、「教育の情報化」の基本となると思う。現地視察として、市立玉津小学校でICTを使った授業を視察した。大きなテレビモニターと旧来の黒板を使っただけの授業であった。教科書に載っていない事柄をモニターで映して、説明などは黒板を使用するものであった。黒板とモニター両方を使うことはとても良いと思うが、教員は逆に操作などの負担があるのでは思うところだが、前述のとおりICT支援員（補助）の力が必要と感じた。今後、横手市でもICT教育が進むと思うが、地域からのマンパワー（支援員）をどうやって得て、協力を求めて地域連携をしていくのか課題となる。

## ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

松山出身の秋山好古・真之兄弟と正岡子規たちの青春像を描いた小説、司馬遼太郎の「坂の上の雲」を軸としたまちづくりを掲げた松山市を視察した。この小説がスペシャルドラマとして放映されたことを契機に、全国発信していることは周知のことだ。この小説をゆかりの史跡や地域資源をひとつの作品にたとえて、市内全体を「屋根のない博物館」と捉え回遊性の高い物語のあるまちを目指している。松山城周辺をセンターゾーンとして、また、道後温泉をサブゾーンとして重点的に整備している。さらにはセンターゾーンに「坂の上の雲ミュージアム」施設を整備し、都市観光の振興を図り、路面電車・バス等の公共交通利用促進に

より回遊型観光を構築している。また、ミュージアム構想を具現化するために、地域資源の利活用に主体的に取り組もうとするNPOや団体に対して市が設置するサポート委員会が支援を行い、官民の協働によるまちづくりを進めている。この事業には助成を行い、上限50万を5年間で減額していくものであった。6月に審査会があり7月1日から翌年1月31日までの事業実施するものであった。これについて年度初めの4月～6月の事業は、実施できないのではと質問したが、不便はないようだった。横手市でも地域づくり活動補助金が今年度から新たに始まったが、申請期間の短さや申請書類の多さにより使い勝手が悪いとしての意見がある中で、参考にしたいために質問した。しかし、松山市でのこの助成については42団体が採択されているものの、不便さの意見はないとしていた。さらにこのミュージアムは指定管理で運営しており、指定管理者は施設管理・維持運営であり、企画展・イベント計画と展示は市直営で行っていた。また、専門の学芸員も市職員との事であり、指定管理者と行政の業務の区分けがよく理解できなかった。横手市でも今後、増田まんが美術館を指定管理での運営計画があるが、まちづくりや地域活性に結び付ける事業は直営となる見通しである。しっかりと業務分担を明らかにして運営してほしいと感じた。

#### ◎遠藤 忠裕 委員

##### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

- ・防災を中心にした地域づくりがタイムリーであった
- ・独自性をもった組織づくり、運営を進めた（強いリーダーの存在）
- ・行政をも超えた（消防団等）活動、組織づくり
- ・地域企業の理解、協力（物心両面）
- ・今後の課題として人材育成をあげていた

##### ②西条市：ICT教育推進事業について

○事業目的 - ICT活用し学力の向上と公務支援システム導入で教師の負担軽減し児童と向き合う時間の創出

- ・ICTを活用することで、楽しい授業を創出し学力向上に結び付ける。
- ・教員が使用するグループウェアに出退勤機能を追加し、極力負担をかけず勤務実態を具体的に把握し負担軽減を図る。
- ・ICT支援員（地域住民）の活用。
- ・バーチャルクラスルーム（遠隔合同授業）の実現で指導の向上を図る。特に小規模校に取り入れ。
- ・将来的には、行政全体への活用法を模索。

##### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

明治改元から150年、21世紀のまちづくり。小説、坂の上の雲で有名になった、松山出身の秋山兄弟、正岡子規の偉業を活かしたまちづくり。松山城を中心に、

小説で紹介された史跡など地域資源を活かし、市内全体を「屋根のない博物館」とし、回遊性の高い物語のあるまちづくり。

#### ◎大日向 香輝 委員

##### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

まず特筆すべきは岩崎会長の素晴らしいリーダーシップである。個人の思いと地域に必要な体制の改善活動が見事にマッチした結果と感じた。組織を8つの部に分け計画と行動をしっかりと行うなど、自治会員がちゃんと組織人としての役割を果たしているところからもうかがうことが出来た。助成金では賄うことが出来ない資金の調達に地元企業の協力や少額の会費徴収などは大変参考になった。防災器具や備蓄も充実しており、見習わなければならないところが沢山あった。

リーダーシップはともかく、公助・共助・自助の意識づけがとても重要だと感じた。

##### ②西条市：ICT教育推進事業について

首長の強い思いによりスマートシティ西条が成り立っていると感じさせられた。電子黒板をはじめ、グループウェアやデジタル教科書など国の方針と一体となり進められており、ベネッセの協力を得てICT支援員の配置など自分にとって夢のような教育の場でした。私の印象に残ったのは、教員の皆さんが「この学校から離れたくない」「スマート化から戻りたくない」という言葉を発していることである。生徒のみならず教員にも最適の環境だと思う。ここまで整備するには資金的にも至難の業ですが、一部だけでも取り入れられればと思う。

##### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

小説をまちづくりに生かすと聞いた時はピンとこなかったが、話を聞いてみて納得した。建物やインフラ整備で街を作っていくやり方がポピュラーですが、テーマに従い、しっかりとしたコンセプトを維持し作り上げていくやり方は凄くスマートで美しいと感じた。もちろん歴史と文化があり出来ることと思うが、NHKスペシャルドラマの放送などタイミングやチャンスが巡ってくるのも、強い思いのなせる業と思う。まさに町全体がミュージアムであると感じた。

#### ◎高橋 聖悟 委員

##### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

世間でいう防災まちづくりは、大半が行政主導でお金もモノもそれ頼りであるが、川西地区の防災まちづくり活動については、コミュニティ組織が積極的かつ効果的な防災体制をとっていることが印象的であった。また、それがまちづくりや地域活性化の面でも効果があることがわかりました。

防災面については、何が困るかを念頭に、予防保全の考え方から、詳細なマップの作成。その中には、製作した複数の備蓄ステーション、防災ステーション、

土嚢ステーション、災害用井戸などが各所に位置され、いざという場面に住民が効率的に活動ができるように施されていた。

予算については、もちろん住民が拠出することだが、賛意を示した企業等も賛助会員として会費をだしていること。そして、その企業はさらに、社屋の提供などで強い協力、連携をしていることが特徴的でした。体系的防災の確立について目を見張るものであった。

また、平時にこの組織は、備品メンテナンスはもちろんのこと、コミュニティだよりの発行、スポーツ大会、環境美化等まちをつくる役目も担っていた。

災害だけに特化しないこの地区の活動は、地域を薄弱化させないための良き指針であると感じてきたところでもあります。他の地域にもこのノウハウを提供しているそうであり、さすが内閣総理大臣賞である。

## ②西条市：ICT教育推進事業について

そもそもこのICT教育は、教育現場だけに特化したICTではなかった。つまり、西条市全体がスマートシティを掲げその一環としてICT教育があるということであった。つまり、地域医療や介護、子育てに教育、そして健康などと共に西条市の将来ビジョンをスマートシティICTで成就するための大きなツールであることがわかった。

市の明確なビジョンを教育に落とし込んだという点で、横手市とは大きく相違するものだった。トップのやる気とセンスがキラリ！と光っている。

ICT機器の導入は予算さえあればできるとのことであったが、しかし、学校現場では新しいことへの抵抗感などもあり、ある種ICT導入への拒否感があるとも考えられたことから、実践校同士が学校を超えて連携し担当する先生を励ましながらアドバイスしながら一丸となってやってきたということである。機械ファーストではなく、常に人間中心でやってきたからたくさんの導入ができたようだ。

ICT教育の内容について、機器については周知のことであるが、支援員の充実、子どもの関心度をあげる、使いやすさを求める努力が見られ、また、校務の負担軽減、ハードでいうと、しっかりしたセキュリティなど、すべてにおいて外部専門家を学校に交えてそれらを解決していることが特徴的であった。また、複式学級の解消や授業の質の向上にも役立っているということがわかったところである。

今回は、西条市より5つの提言をいただけてきた。それを噛み砕き横手市においても実践可能かどうか探してみたいと思う。

## ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

松山市では「坂の上の雲」のまち 松山から未来を拓く」というキャッチフレーズを定めて、松山の魅力を振りかえり、ふるさとへの愛着や誇を高めると共に、主人公のように市民が夢や希望を抱き挑戦し続けるまちづくりを行おうという気

概が感じられた。

もちろんそれは市の組織機構にも体现されており、坂の上の雲まちづくり担当部長付がおり、その熱意は伝わる。我が市にはそれがあるだろうか。まんが美術館、一番大きなシティセールスというが、それは、組織にも手法にも表れていない。残念である。

要は構想である。オール松山ならぬ、オールよこてである。単発単発の連続ではまちづくりはできないと、坂の上の雲を軸とした21世紀のまちづくりビジョンを聞いてつくづくそう思った

## ◎佐々木 喜一 委員

### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

同地区は水による災害が起きやすい地形のようで、防災という意識を早くからもっていた。熱心なリーダーの元で地域の自治会、青年会、婦人会、学校関係など全ての活動に関わりながら啓蒙、意識高揚を図っていた。一地域の活動ながら、東日本大震災では岩手県で活動したとも話された。熱心な活動を感じたが、活動年代が高齢となる中での課題は後継者育成にあるとも。

地域を思う熱心さを繋いでくることが大切だと感じた。

### ②西条市：ICT教育推進事業について

少子化の時代をむかえ小人数の学校が増える状況は全国同じであり、その課題の大方を解決できるかもしれないヒントが視察した玉津小学校にあった。同市が取り組んでいたコンピューターネットワークを活用した学校内、学校間、学校と教育委員会の連携、情報共有である。生徒の情報、学校のその日の状況が教育委員会では、リアルタイムで把握できるシステム、学校間では大型スクリーンを利用し、離れた地域の学校の生徒と同時進行で会話しながら、同じ教室で授業しているかのような状況を作っていること。教師は学習の進め方などを教師全員が共有していることなど。結果、生徒の学力の向上にもいい結果をもたらしたとも。

予算さえ手当てできるとするならばメリットは大きいと感じた。

### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

道後温泉を有する松山市、さらに有名にしたのは小説「坂の上の雲」である。松山城も加えての観光をどのように考えて地域活性化に生かしていくのかが視察のテーマでありました。多くの事業が行われていましたが、市としての基本的な姿勢は、大きくは市が関わって計画を進める。実行には民間のノウハウ、力を借りながら市が責任をもち民間で進めていくものと、市が関わり続けていくものがあると。横手市も同じかもとも思いながら、その意味は運営の委託はあるが市全体の発展を視野にソフトの面で予算をもちながら積極的に関わると聞こえた。



## ◎土田 百合子 委員

### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

丸亀市川西地区自主防災のまちづくりについて視察し、活動から学んだことは、「我命、我地域は、我々の手で守るしかない」という地域をまとめるリーダーがいることが大事なポイントであると感じた。また、行政に依存しない方向で企業や大学の協力を得て、あくまでも自主自立型で、活動を推進している事や、地元小学校での防災教育の取り組みが、子どもたちへの「防災文化」の形成につながっていることも素晴らしいと感じた。真剣な防災活動の実践から多くの事を学び大変に貴重な視察であった。

平成14年4月からの主な取り組みは「わが街はわが手で守る」を思いに「人づくり」「物づくり」「絆づくり」の展開である。

人づくり：(1)学校での防災教育 (2)訓練 (3)研修 (4)普及・啓発活動

物づくり：(1)防災機材、備品食品の整備 (2)資機材の維持管理

絆づくり：(1)災害時要援護者支援 (2)企業・団体との連携(3)広域連携(4)広報活動

当市でも自主防災組織を今後どのように進めていくかは課題である。現在、地区交流センター化のまちづくりが進められているが、災害が起きた時に、早急に対応できる体制が取れるような、地区の具体的な防災マップを作成するなどの取り組みが必要と感じている。そのためには、防災意識を高め、リーダーの育成に力を入れることが大事である。最近の異常気象により、防災意識は大変関心が高いと感じている。特に、地域防災の在り方を検討し、身近な「向こう3軒両隣」の助け合いの精神が機能するような防災のまちづくりを進めるべきであると感じた。

### ②西条市：ICT教育推進事業について

西条市では、平成27年度から先進的なICT教育推進事業を本格的に進めている。小学校26校、中学校10校に「電子黒板・デジタル教科書類」や「総合型校務システム・テレワーク」、「児童・生徒用タブレットPC活用」等である。

ICT支援員(11人)が、先生方の授業の内容や準備をサポートして下さり、重要な役割を果たしている。校務支援システムの導入にあわせて、小中学校出席簿の統一や、成績処理、保健室業務などの、記載すべき情報を必要最低限に絞り、作業効率の向上を図り、スマートスクールをめざす。

玉津小学校のICT授業の取り組みを視察したところ、すべての教室に電子黒板が設置され、授業が行われていた。先生方からは、「電子黒板を使った授業で授業の幅が広がり、子どもたちの学習意欲も、大きく高まったのを実感している。」との声や、ICTを活用した学力の向上については、平成28年度末、4年目の累計結果として、全国平均11.0ポイントアップし、校務にかかる時間の114,2時間

と短縮させることができ、子どもたちとの触れ合う時間が多くなったとの感想をいただいた。西条市の特徴的な取り組みとして、学校間の教室を繋ぐ合同授業を行う「バーチャルクラスルーム」の実現である。

横手市では、児童生徒の減少により、小規模校が増える中で「学校統合」を選択してきたが、西条市は統合をしない方向で、ICT教育で小規模校の教育の質の向上を図ることで「地域の学校」を存続させている。必ずしも、最初から「統合ありき」ではない選択肢もあることを知った。これからの学校統合の中で、子どもたちにとってどのような環境の中で、勉強することが良いのか、議論が必要と考える。今回の視察を通じて、ICTの活用は必須であり、逃れることはできない時代に到達していることを改めて痛感させられた。第3期教育振興基本計画では、2020年度までに、小学校ではプログラミングが必修となることから、今後のICT教育の取り組みについてのチェック機能を果たしていきたい。

### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

松山市では、小説「坂の上の雲」の3人の主人公が抱いた高い志とひたむきな努力、夢や希望をまちづくりに取り入れている。新しい物を作るだけでなく、地域の古くから培ってきた既存の地域資源を最大限に活用し「物語」が感じられるような「小説」を活かしたまちづくりである。

坂の上の雲ミュージアムは、安藤忠雄氏設計の鉄筋コンクリート、地下1階地上4階の建物である。市民主体のまちづくりでは、地域資源の利活用に主体的に取り組もうとするNPOや市民団体に対し、フィールドミュージアムサポート委員会が支援を行い官民によるまちづくりが進められており、これまで42団体の活動支援を行っている。また、「地域の宝みがきサポート事業」は、まちづくり協議会または、公民館が、地域の宝（地域資源）の利活用や、情報発信を目的とした開設板、案内看板アクセス整備等を行う場合の整備費用として1地区につき上限30万、補助率10/10とし官民一体のまちづくりが進められている。これまで年間の観光客数は、平成11年をピークに減少していたが、ドラマが始まった頃から60万人に回復した。

坂の上の雲ミュージアムの管理は、指定管理だが、展示は松山市で企画するなど仕様書で業務を定め、すべて指定管理ではないとのことであった。当市の近代的なまんが美術館と内蔵が現存する昔ながらの街並みをどのように連携し発信するかはこれからの課題であるが、運営の在り方なども含め今回の視察から学ぶことが出来たと思う。また、まちづくりの主体は市民であることを再認識し、「地域の宝みがきサポート事業」などを取り入れてはどうかと思った。ますます過疎化が進む中で、官民一体となったまちづくりをもう一度、検討する必要があると感じた。最後に、心のつぶやきとして、世界一のまんが美術館にするためには、任せきりではいけないということ。より一層の工夫と、もう一度来てみたいと思わせるおもてなしが大事である。素晴らしいと感じた喜びも最後のデザートがま

ずければ、一瞬にしてがっかりしてしまうこともある。最後まで、素晴らしいと感じて帰っていただくためのストーリーを考えてみたいと思った。松山市のミュージアムのすぐ近くには、国の重要文化財指定を受けているフランス風の館「萬翠荘（ばんすいそう）」があり、ほんの数分間、立ち寄ったがどのような物語があるのかも一度行ってみたいと思った。

※フィールドミュージアムとは、博物館の「箱もの」に展示物が入っているというスタイルではなく、地域の自然や人々の営みそのものを博物館とみなし、研究・保全・普及という博物館的活動を通じて社会的にも経済的にも活用を図ろうという構想である。

## ◎塩田 勉 委員

### ①丸亀市：川西地区の防災まちづくり活動について

コミュニティセンターを中心とする防災組織の取り組みについて、行政及び消防組織以上に住民の方々の意識が強かった。特に、防災倉庫は、他の自治体よりもはるかにレベルが高く、防災備品については、各資機材、緊急食料品の備蓄があまりにも充実しており、行政の取り組みよりもはるかに進んでいた。

### ②西条市：ICT教育推進事業について

市長の政策が、児童数の減少を踏まえ、学校の統廃合はしないという方針のもとに遠隔会議システムによる合同授業により改善を促進し、学力の向上を図っていた。また、教職員の負担軽減のために勤務時間の短縮を図り、働き方改革の先進事例でもあった。

### ③松山市：坂の上の雲まちづくりについて

今回は2回目の視察であったが、学芸員の説明をいただき、ミュージアムが「坂の上の雲」の小説が明治の歴史が一般の人にも分かるような展示がされていた。松山市の歴史と明治の人がどのように時代背景を映しながら将来における松山市のあるべき姿を当ミュージアムによって分かりやすく理解できるよう展示されていた。司馬遼太郎氏の坂の上の雲の小説がテーマとなって明治時代の再評価をイメージできる素晴らしい施設であった。

以上、報告いたします。